

大鹽中齋の學說(承前)

高瀬 武次郎

信 太 虛

中齋曰く、「太虛の説は釋老に似たり」と今先づ中齋の太虛説の要領を摘叙せんと欲す。

中齋は常に太虛に歸するには致良知の功夫に由らざるべからず若し致良知に由らずして太虛に歸せんか空寂虛無即ち佛老の説に陥るべしと云へり、太虛説は宋の張横渠の已に説ける所にして中齋がこれを張横渠より承けたることは筭記中に明言したる所なり、然れども其の張子と異なる點は心を太虛至誠の狀態に歸せしむるには致良知の功夫に由るべきことを以てしたることは是なり。而して歸太虛とは結局至大の仁を求むることを意味するものにして、人我の別を去り、天地萬物を以て一體と爲し、一視同仁、四海同胞の念を以て要點と爲す、宋の程明道が仁者以天地萬物爲一體と云ひ、我と非我との別を除去し、己を愛するの念を以て自己以外の萬物を愛す

ることを云へるは、中齋の歸太虚説と異語同義なりとす。

中齋が歸太虚説を唱ふる所に一種の大我を示せるあり、其の要旨は宇宙即ち我なり、我即ち宇宙と觀するものなり、日月を我が兩眼と爲し、雨水川流を以て我が血液と爲し、草木を以て我が毛髮と爲し、土石を以て我が骨肉と爲し、萬物は悉く我が身内の物と爲すものなれば、人畜の苦樂禍福を以て直接に自己のものと感ずるのみならず、草木瓦石の摧折破壊に至るまで皆な之を以て自己の苦痛と爲すなり、是れ中齋が畢生の至願として達せんと欲したる理想的巨人觀なり、然れども彼が此所に達し得たりや否は直に斷言すべからざるものあらん。吾人は遠く溯りて中齋歸太虚主義の淵源を探求し以て充分に其説を了解せんと欲す。

第一節 天地萬物一體の觀念の淵源

一 尙書に見えたる天人の關係

尙書、周書の泰誓上篇に曰く、惟_レ天地萬物、父母、惟_レ人萬物之靈_{ナリ}、_{マコトニ}聰明作_ニ元_ト後_ト、_{ナルヲス}作_レ民_ト、_トること_レ得_レべし、但だ此語が最も明白に天人の關係を示したれば、今之を引用せり。

二 莊子の語と中齋

莊子の天下篇に惠施の徒が詭辨的論題と爲し、數十の問題を列記せる所に汎愛^ク萬物^ヲ、天地一體也と云へる一題あり、唯だ論題のみ掲げたるものなれば其内容は今日詳に之を知ることを得ず、唐の成玄英の疏には萬物與我爲一、故汎愛^ク之^ヲ。二儀與我並生^ズ、故同體也^トと曰へり、果して論題の眞意を得たりや否や、且つ又た惠施は名家又は法家の人と見るべきものにして、儒家の人には非ざれども、此語は愛の一方より大觀して萬物一體を説きたるものならんか、愛は仁の要素にして孔子の説に従ふも亦た仁は愛を以て主要と爲すこと明かなり、加之、宋の程明道が仁者は天地萬物を以て一體と爲すと説き、人我内外の間隔を撤去して、至大の仁愛を行ふべきを示せると同じからん、故に之を參考するも決して無用の事に非るべし。

三 禮記禮運の語と中齋

禮記禮運(第九)ニ曰ク

聖人耐^{コク}以^テ天^ヲ、下^ヲ爲^ス二^一家^ト、以^テ中^ヲ、國^ヲ爲^ス二^一人^ト。

又曰ク

人者其^ハ天地之徳、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也、

又曰ク

人者^ハ天地之心^{ナリ}也。五行之端^{ナリ}也。

禮運の語は屢引用さるゝものにして天地と人との關係を示せる頗る有力なるものなり、程明道の天地萬物一體の語の如きも主として此ここに胚胎せるものならん。然れども禮運の語は至て簡單なれば之が意義を知るには熟考を要すべけれども、大體に於て斯かる傾向あることを他語より比較推究せば必ず其の正鵠を得べけん。

四 陳希夷の説と中齋

陳希夷は自ら道教を以て任じ其の説く所は明かに古來道家の思想を繼承したる迹あれども之を以て老列莊三子及び晉の葛洪の書に比すれば著しき差異あるを知るなり、陳希夷が宇宙萬物を觀る所は宛然宋儒程明道張橫渠等に酷似するものあり、其の思想の深遠にして條理貫通する所あるは優に道教の宗師たるに足るものゝ如し、陳子が萬物同體の平等觀を示せる語は左の如し、陳子又木巖道人と號す、

木巖初集の盧晴問答卷上の大意に謂へらく、天地の氣自然なり、邊彝中國上下の性は別なし、總て是れ生々造化、化育は二ならず、故に同體と曰ふなり、萬物同根とは血性の屬三千あるも生死の念は實に一なり、故に春は長せざるの草なく、冬は果らざるの物なし、類は異に品は殊なりと雖も知るは則ち一なり、食息同からざるも、心あるは則ち一なり、唯草木は陽を秉て而して生じ陰を見て衰ふ云々と。

惟ふに陳子は萬物の生々造化化育の點より觀察し其理と氣との同一なるを以て之を同根同體と曰ふなり、若し差別の方面より見るときは森羅萬象殆んど一物も同じきものはなければども此の千差萬別の裏面に一貫通融する所の理氣の存するあり、此の共通點を洞觀して初て萬物一體の觀念を抱き得べし、宇宙間人類動植の類皆な此理に由て生々化育せられざるはなく、榮枯盛衰も亦た此の共通の理氣に因らざるはなし、但陳希夷が萬有一體を觀するに生々化育する所以の力は萬有以外に在りて此等萬物を支配するものと考ふるか、換言すれば超越的神教の立脚地に在るか、將た又生々化育する力は萬有の中に包含せられて相通するものとするか、即ち萬有神教的立脚地に在るか、明白ならざるの憾あり、恐らくは萬有神教的立脚地に在らん、道家若くは其の思想を承けたる諸派の説には萬有神教的立言あるを見る、陳子も亦之を

承けたる者の如し、陳子は道教の宗師と仰がるれども自ら三教一致主義を標榜するが故に其の根本思想に於ても儒家と異ならざるに似たり、故に吾人は特に陳子の思想を引て天地萬物一體の至大の觀念を明かにせり。

五 明道と中齋

程明道曰く、

人與物但氣有_二福正_一耳、獨陰不成、獨陽不生、得_二陰陽之變_一者、爲_二鳥獸草木夷狄_一、受_二正氣_一者、爲_二人_一、卷二程
五丁

此の説に依れば人類も萬物も其の氣を稟くる根源に於て共通する所あるを示せり、然れども氣の共通と曰ふときは只だ人類萬物は形體に於て同根と見らるべきものあれども明道は更に物的心的の兩方面に於いて共通なることを明示せり、曰く、天地之間非_レ獨人爲_二至靈_一、自家心便是_二草木鳥獸之心也_一、但人受_二天地之中_一以_二生爾_一、卷二程
全書
一五丁

心的關係より曰ふも亦た人類の心は即ち是れ草木鳥獸の心なりとす、是れ又た其の生成の根源を共にするより説きしものにして、且つ草木に心ありと曰ふに至ては一見すれば了解するに苦むが如くなれども萬物を氣一元より説明せんとするが故に

同一の方面より見ては萬物悉皆同一にして其の靈不靈の差異あるは徹頭徹尾二氣交感の偏正の程度に由るとするのみ、是故に萬物一體若くは同根なる説を生じ、仁の意義を説くにも萬物を以て一身と爲すに至りて仁者以天地萬物爲一體と云へり、

六 張横渠の太虚説と中齊

張子は正蒙の中に主として太虚を説き、別に西銘に至大の仁を説きて四海同胞天下一家の意を示せり、然るに中齊は其劄記の中に太虚と説きて直に至大の仁を表示し、天地萬物一體觀、内外の界を通じ人我の別を去ることを主張し、天地萬物を以て一大巨人として人格觀をせり、宇宙即ち大人間、人間即ち小宇宙を示せり、之を換言すれば人者天也、天者人也と云ふ、更に之を約して言へば天人合一、一心合天と云ふ。天人合一は實に儒教の極致にして此境に達する聖人は中庸に所謂天地位焉萬物育焉と云ひ、天地の化育に參贊するの效を遂げ得べきなり。中齊は自ら幾分か横渠の太虚説より得たることを公言すれども其の要旨は依然として王陽明の説より得たることを言へり、彼は唯だ張子の正蒙のみを讀て太虚の説を知らば則ち唯其の言語のみを知れども太虚に歸すること能はず、歸太虚は致良知より得べしと言へり、唯だ太

虚の意味のみを知るも致良知に依らずんば實行の熱を生じ來らず其實行熱即ち炎々燃ゆるが如き熱情の湧出し治國平天下の爲に獻身的行動を起さしむる者は致良知より進みたる歸太虚に由らずんばならず換言すれば自己の利害得失を忘れ熱心に行動すること能はざるなりと

張横渠謂へらく

「乾を父と稱し、坤を母と稱す、予が茲の藐焉たる乃ち混然として中に處る、故に天地の塞は吾が其體なり、天地の帥は吾が其性なり、民は吾が同胞にして物は吾が與なり、大君なる者は吾が父母の宗子なり、其大臣は宗子の家相なり、高年を尊ぶは其長を長とする所以なり、孤弱を慈しむは其幼を幼とする所以なり、聖は其れ徳を合す、賢は其秀たるなり、凡そ天下の疲瘵殘疾、憊獨、鰥寡は皆な吾が兄弟の顛連して而して告ること無き者なり、云云。

張子の西銘は宋代有數の名文として知らるゝものにして其主意は亦た天地萬物を以て一體と爲す者なり。中齋の太處説の淵源と爲せるものゝ一たること疑なし。

七 陸象山の宇宙觀と中齋

陸象山謂へらく、

「宇宙内の事は乃ち己が分内の事、己が分内の事は乃ち宇宙の事、又曰く、宇宙便ち是れ吾が

心なり、吾心即ち是れ宇宙なり、東海に聖人ありて出づるも此心同じく此理同じ、西海に聖人ありて出づるも此心同じく此理同じ、南海北海に聖人ありて出づるも、此心同じく此理同じ、千百世の上より千百世の下に至り、聖人ありて出づるも、此心此理も亦同じからざることなし。(象山全集年譜)

又謂へらく

「宇宙は會て人を限隔せず、人自ら宇宙を限隔す」と、(同上)

又謂へらく

「道は宇宙に塞がる、隱遁する所あるに非ず、天に在りては陰陽と曰ひ、地に在りては剛柔と曰ひ、人に在りては仁義と曰ふ、仁義なる者は人の本心なり。

又謂へらく

「是理は宇宙に充塞す、天地は此れに順うて而して動くが故に日月は過たず、而して四時或はず、聖人は此れに順うて而して動くが故に刑罰濇くして而して民は服す。(同上)

又謂へらく、

「此理は宇宙に塞がる、誰が能く之を逃れん、之に順へば即ち吉なり、之に逆へば即ち凶なり」と。(同上)

以上に掲ぐる所の陸子が語を精讀玩味せば中齋の太虚説の主旨を了悟するに大益あらん、蓋し大意は殆ど同じくして其用語を異にするものなり。

八 王陽明の良知説と中齋

陽明先生の所謂良知を致すの實功を積むに非ずんば即ち横渠先生の所謂太虚の地位に至るべからず、故に心を太虚に歸せんと欲する者は宜しく良知を致すべし、良知を致さずして太虚を語る者は必ず釋老の學に陥る恐れざるべけんや。(劄記十八丁)

ア 太虚説の由て來る所

或人曰く子動もすれば心の太虚に歸するを以て言を爲す、張子の正蒙より來るや否や、曰く吾太虚の説は致良知より來りて而かも正蒙より來らず、然れども正蒙を述ること能はず、學徒如し吾が正蒙を述ること能はずと曰ふを信じて只正蒙を讀みて太虚の説を知らば則ち特に其言語を解し得んのみ、而かも必ず太虚に歸すること能はざるなり、故に致良知は其れ之れに至るの道なるか。(劄記上十七丁)

イ 王陽明も亦太虚説あり、

或人問ふ、陽明先生も亦明かに太虚を言ふと、有リヤ曰く有リ、語録に曰く、聖人は只是れ他（他）の良知的本色に還る、更に些（少し）子の意を著けて在らず、良知の虚は便ち是れ天の太虚、良知の無は便ち是れ太虚の無形、日月風雨山川民物、凡そ貌象形色あるは皆な太虚無形の中に在リ、發用流行未だ嘗て天の障礙を作し得ず、聖人は只是れ其の良知の發用に順ふ、天地萬物は俱に

我が良知的發用流行の中に在り、何ぞ嘗て又た一物も良知の外に超えて能く障礙を作し得るあらんや、と此れ豈太虚を道ふに非ずや、吾が太虚の説は皆亦此を祖述し來る、而して張子の太虚も復た之に異なることなし、人如し欲なくんば即ち獨り自ら了悟せん、否んは則ち必ず老佛に類すと疑ふ者あらん、辨せずして可なり。(割記下六丁)

ウ 王陽明の拔本塞源論

三輪執齋曰、案是至論中之至論、明文中之明文、自秦漢以來數千歲之間、唯有此一文明而已、

王陽明先生の拔本塞源論の一節に謂へらく

「夫れ聖人の心は天地萬物を以て一體と爲す、其の天下の人を視ること外内遠近となく、凡そ血氣ある皆な其昆弟赤子の親なれば安全にして之を教養し、以て萬物一體の念を遂ぐることを欲せざるはなし、天下の人心は其始は亦聖人に異なることなし、特に其の有我の私に間てられ物欲の蔽に隔てられて大なる者は以て小さく、通する者は以て塞かる。人は各々心あり、其父子兄弟を視ること仇讐の如くなる者あるに至る、聖人之を愛ふることあり、是を以て其の天地萬物一體の仁を推て以て天下を教て之をして皆な以て其私に克ち其蔽を去て以て其心體の同然に復することあらしむ云云。(傳習錄卷中、答人論學書)

王陽明の拔本塞源論は惡の本を抜き濁の源を塞ぎ以て天下の人心を清め萬物一

體の至大の仁に復せしめんとする主意なれば其要旨は張横渠の西銘と異なることなし、西銘に頑愚を訂正するの主意を述ぶるは則ち惡本濁源を拔去洗除すると異なることなし。且又程明道の識仁篇の主意も亦た之に異なることなし。斯かる至大の觀念を説ける者は王陽明の遺著の中には所々に見ゆれども拔本塞源の一篇の如く詳かなるはなからん。

中齋は張横渠王陽明より影響を受くること甚だ大なれども洗心洞學名學則には我學は陽明學とは稱せず唯孔孟學と稱すと曰へり。

九 中根東里の天地萬物一體訓と中齋

上人説

吾聞^ク之^ノ人^ハ者^ハ天地之心也、故^ニ天地者^ハ人之身也、萬物備^ル焉、無^レ内^ニ無^レ外、無^レ始^ニ無^レ終、何^レ時^カ非^レ仁、何^レ處^カ非^レ中、詠^フ合^フ和^フ暢^フ、浩^フ浩^フ悠^フ悠^フ、此^レ謂^フ宇宙^ト、宇宙^ト即^チ是^レ人^ト、人^ト即^チ是^レ宇宙^ト、人之大全也、嗟^フ乎[、]宇宙^ト不^レ曾^レ限^ル、隔^ル人^ト、人^ト自^ラ限^ル、隔^ル宇宙^ト、(陸象山語)謂^フ之^ヲ小人^ト、學問之道^ハ無^レ他^ニ、擴^ス其^ノ藩^ニ籬^ト而已^ニ。

是れ則ち東里の人説にして人と天地との關係を示し陸象山の語を引て其説を詳示せり。

下 一體之訓

一體之訓其由て來ること久し、後儒の新意に非ず、近世以來其説は明にして且つ備はれり、亦加ふべからず、今其始を原ねて以て同志に告ること左の如し、尙書の泰誓に曰く、惟天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈なり、夫れ天地果して萬物の父母ならば萬物は乃ち天地の子なり、子と父母と一體ならざるものあらんや、禮記禮運に曰く、人は天地の徳なりと、又云く人は天地の心なりと、人果して天地の心ならば、天地は乃ち人の身なり、身と心と一體ならざるものあらんや、心と徳と一體ならざるものあらんや、萬物の區にして以て別れたるは一身の中に於て耳、目、口、鼻、首、足、肩、背、各其分ち有るが如し、或は貴くして上にあり、或は賤くして下にあり、或は遠く或は近く、或は大或は小、其差等節目得て混同すべからず、然れども精神周流し、脈絡貫通し、疾痛歡樂感觸神應せざることなし、是故に上なるものは下を愛し、下なる者は上を敬し、遠きを忘れず、近きを忽にせず、大に事へ小を宇やなひ相助け相安んじ樂むに天下を以てし憂るに天下を以てす、是れ堯舜の治體にして聖樂の大本大源なり、吾侪是に於て心を專にし志を致して講究體認することを務めずして末を逐ひ流に隨ふて滔々として反らず、日を曠くし時を失ひ遂に以て此の生を虚くするに至る、其の以て然る所の者は何ぞや一體の中に於て自ら異にして各其の藩籬を高くする故なり、其れ斯の如くなれば人は只是れ一團の血肉のみ、豈以て天地の心とするに足らんや、前聖の言斯の如し、夫れ粲然として明なれば大程子王子の説も何の疑ふべきことの有らん、程明道曰く、仁者天地萬物を以て一體とす已れに非ざることなしと、天地も己れなり、萬物も己れなり、天は己れが高きなり、地は己れが厚きなり、日月は己れが明かなるなり、四時は己が變化なり、鬼神は己れが測るべからざるなり、

學者誠に其心を存し其氣を定め人我の見を去り意必の私に勝て眞誠に之を體察せば天地萬物は吾に於て毫末の間隔なきを見て聖賢の吾を欺くにあらざることを信得すべし、況や陰陽五行の人にあるもの天地四時と共に往來變化して曾て内外彼此の別なし、喜怒哀樂視聽言動天地萬物に於て一毫の間隙あれば斬るが如く刺すが如く、疾通側但忍ぶべからず、一體にあらずんば豈斯の如くならんや、是を以て古の聖賢人は飢溺の如く一夫も獲ざれば己れ推して是を溝中に納るゝが如く、天下の憂に先だちて憂へ汲々逸々として席を煖むるに暇あらず故に此の紛冗を求めて以て自ら勞苦するに非ず、只是れ萬物元と吾が一體なれば生民の困苦荼毒は孰れが疾痛の吾が身に切なる者にあらざらん、吾身の疾痛を知らざる者は是非の心なきものなり、大程子は學で至る所を以て云ふなり、禮記と尙書泰誓とは聖愚の同じく然る所を指して云ふなり、夫れ天地萬物は元と一體なれば天地萬物元と一物なり、所謂格物は此一物を格すのみ、此一物を格すとは其本然に復るのみ、聖人の學は其れ廣大にして簡易なること此の如し、程明道は之を宋に唱へ王陽明は之を明に和し天下萬物に示すに宇宙の大全を以てす云云。(東里外集)

以上に列擧したる九種の引用文は皆な中齋の歸太虛説の淵源と爲すべきものにして天地萬物を以て一體と爲すものなり、斯かる思想は時代に由りて盛衰隱顯なき能はずと雖も其の根柢は廣く東洋思想界に遍滿せるものなり。

第二節 宇宙的大人間(天地萬物一體の觀念より起り來れる滿天地的巨人)

方寸の虚は太虚の虚と通ず、而して方寸の虚は即ち吾心なり、吾心は即ち太虚と通ずるものなり、此の内外の融通の點よりして小宇宙と大宇宙との通融して間隔なきを説く、之を説くに當りて中齋は極て大膽に極て極端に人心と太虚との體用を説けり。

中齋は常に宇宙を人格化して説けり、天人の通じて一と爲るは即ち人の能く大宇宙に合一するなり、中齋は天地の太虚を悉く吾人の心内に存することを觀し、大宇宙を吾が心内に具有するの至大の觀念を得るを以て歸太虚の極致と爲す、換言すれば中齋は宇宙を人格視し、人間を宇宙化することを眼目とす、中齋曰く、

軀殼外の虚は便ち是れ天なり、天は吾が心なり、心が萬有を葆含することは是に於て悟るべし、故に血氣ある者より草木瓦石に至るまで、其死を視、其摧折を視、其毀壞を視れば則ち吾心を感じせしむ、本と心中の物たるを以ての故なり、若し先づ慾ありて而して心を塞げば則ち心は虚に非ず、虚に非ずんば則ち頑然たる一小物にして而して天體に非るなり、便ち骨肉と既に分隔し了る、何に況や其他をや、之を名くるに小人を以てす亦理ならずや、(割記上一丁) 眼を開て天地を俯仰し以て之を觀るときは則ち壊石は即ち吾が肉骨なり、草木は即ち吾

が毛髮なり、雨水川流は即ち吾が背血精液なり、雲煙風籟は即ち吾が呼吸吹嘘なり、日月星辰の光は即ち吾が兩眼の光なり、春夏秋冬の運は即ち吾が仁義禮智信(五常)の運にして太虚は即ち吾が心の蘊なり。嗚呼人は七尺の軀にして天地と齊しきこと乃此くの如し、三才の稱は豈に徒然ならんや、宜しく氣質を變化して以て太虚の體に復すべきなりと(割記上、十四丁) 慶雲鳴雷凄風和氣は皆是れ太虚の象にして而して常に有らず、然かも時ありてか出づ、喜怒哀樂は皆な是れ人心の情にして而して常に有らず、然かも時ありてか起る故に喜怒哀樂は便ち是れ天の慶雲鳴雷凄風和氣にして而して慶雲鳴雷凄風和氣は便ち是れ人の喜怒哀樂なり、元と是れ二ならず、然り而して人は太虚に歸せずして而して喜怒哀樂が情に任せて起滅するときは則ち徳を亡ぼし身を喪ふの基なり、故に君子は獨を愼む、太虚に歸するは惟是れを之れ務む、是を以て喜怒哀樂の境に當りては尤も忍て輕しく起さず、吾々の如き者は則ち之に反す、宜しく愼むべきなり。(割記上、三十五丁)

心が太虚に歸するときは則ち太虚は乃ち心なり、然る後に當さに道と學との崖際なきを知るべきなり、夫れ人の嘉言善行は即ち吾が心中の善にして人の醜言惡行も亦吾が心中の惡なり、是故に聖人は之を外視せず、齊家治國平天下は一として心中の善を存せざるはなく、一として心中の惡を去らざるはなし。道と學とは崖際なきとを見るべし。或人曰く子の説の如くんば則ち惡人の刑に羅るも亦聖人の心を刑する者か、曰く然り、是れ即ち吾が心の惡を去るの道なり、然り而して悲まざるを得ず、豈亦歡喜すべけんや、曰く善人の賞に遇ふも亦聖人の心を賞する者か、曰く然り、是れ即ち吾心の善を存するの道なり、然り而して喜ばざるを得ず、豈に亦媚嫉すべけんや、只だ人の善を媚嫉し人の惡を歡喜する者は吾が心を以て吾が物と爲す、乃ち一小人にして而して聖人太虚の心に非ざるなり、然らば則ち心なる者は

善惡混するか曰く心の體は太虚なり、太虚は一靈明のみ、何の善惡混することか之れ有らん、然かも氣の往來消長は則ち過不及なきことを得ず、只其の過不及は便ち是れ^滲氣の由りて生ずる所なり、而かも未だ嘗て太虚の靈明を損すること能はざるなり、子が試に眼を仰きて天を看るときは則ち疑も亦自ら解けん、焉くんぞ吾の辯を待たんや。(劄記上、四十八丁)

聖人は即ち有言の太虚にして太虚は即ち不言の聖人なり。(劄記下、二十三丁)

第三節 太虚說

一 心を説く

心は則ち五臓の心にして而して別に心なる者あらざるなり、其五臓の心は僅かに方一寸にして而して天理を蘊蓄す、唐凝庵曰く、性は是れ此氣の極て條理あるの處に過ぎず、氣を舍るの外は安んぞ性あるを得ん、心は五臓の心に過ぎず、五臓を舍つるの外に安んぞ心あるを得ん、心の妙處は方寸の虚に在り、則ち性の宅る所なりと、吾説は之と期せずして而して符を同くす、猶ほ君子の論を俟つ。(劄記上、五十七丁)

二 心と身との關係

形よりして言へば則ち身が心が衰み、心が身内に在り、道よりして觀るときは則ち心は身を衰み、身は心内に在り、其の心は身内に在りと謂ふ者は一たび操存の功を遺れば則ち物を我を累はず、其の身は心内に在りと覺る者は常に超脱の妙を得て而して我が物を役す、物を役すると物に累はさるゝとの別は學者は宜しく之を知るべし。(劄記上三、丁)

三 心は善惡共に無し、

心の體は虚靈のみ、惡は固より無し、善と雖も有るべからず、如し先づ善ありて而して之を塞がは則ち神明は終に用を爲すこと能はず。(割記上十一丁)

四 太虚と吾心の本體

身外の虚なる者は即ち吾心の本體なり、故に曰く、大を語れば天下能く載すること莫しと。(割記上二丁)

五 太虚と竹中の虚

天は特に上に在りて蒼々たる太虚のみにあらず、石間の虚、竹中の虚と雖も亦天なり、況や老子が云ふ所の谷神をや、谷神とは人心なり、故に人心の妙は天と同じ、聖人に於て驗すべし、常人は則ち虚を失ふ、焉んぞ之を語るに足らんや。(割記上一丁)

六 聖人と常人との方寸の虚

常人の方寸の虚は聖人の方寸の虚と同一虚にして而して氣質は即ち清濁昏明は年を同くして語るべからざるなり、猶ほ貧人室中の虚と貴人室中の虚と同一虚にして四面牆壁、上下屋牀は則ち美惡精粗の同からざるなり、而して方寸の虚なる者は便ち是れ太虚の虚にして而して太虚の虚は便ち是れ方寸の虚なり、本と二なし、畢竟氣質が之を牆壁するなり、故に人は學て而して氣質を變化するときは即ち聖人と同じき者は宛然徧布照耀す、包涵せざるな

く、貫徹せざるなし、嗚呼氣質を變化せずして學に従事する者は其の學ぶ所は將た何事ぞ、
と謂ふべし。(割記上五丁)

七 太虚に就て仁義禮智と春夏秋冬

眼を閉て之を反觀せば即ち方寸の虚も亦春夏秋冬のみ、眼を開て之を放觀せば即ち天の
太虚も亦仁義禮智のみ、天人合一疑なし。(割記上、二十九丁)

八 心虚なれば天なり、

春夏秋冬は太虚より來りて以て萬物を終始して循環息まず、毫も跡なきなり、仁義禮智は
此此と一般なり、故に心虚なるときは則ち之を天と謂ふも大言に非るなり。(割記上十三丁)

九 天人は通じて一なり、

日色薄くして而して月光の明かなるを瞻れば則ち知者は陰が陽を凌ぐを知る、眸子眊く
して而して血氣浮ぶを見るときは明者は邪が正に勝つを知る、天人本と是れ通一にして欺
くべからざる者なり。(割記上三十一丁)

十 名譽の萬世不朽なる所以

聖賢名譽の萬世に傳はりて而して朽ちざる者は此れ名譽の萬世に傳りて而して朽ちざ
るに非るなり、其の初より終に至り實踐する所の仁義禮智の徳が天の春夏秋冬と只一箇な
るが故に、其人は死すと雖も、其靈が春夏秋冬の氣に駕し天地間に徧布充満して而して人は

證る能はず、是を以て萬世に傳はりて而して朽ちざるなり、假善偽行にして而して焉んぞ此に至らんや。(割記上二十九丁)

以上に列掲せし十條は中齋太虚説の要點にして猶ほ詳細は之を洗心洞割記に徴せらるべし、該十條を熟讀せば中齋が説かんと欲する大要は能く之を了解すべし、彼の説には往々にして獨斷的僻説神祕的冥想に類するものありて後の研究者をして順序的に探討すること能はざらしむるものなきに非されども大體に於ては彼が如何なる目的に向つて如何に説き去らんとするかは之を推知すること難からず、彼の獨斷的又は神祕的なる點は却て中齋の哲學に異彩を添ふるものとして特に之を玩味せざるべからず

第四節 歸太虚の功夫

一 存天理

心が太虚に歸することは他に非ず、人欲を去りて天理を存すれば乃ち太虚なり。(同上五十五丁)

二 誠意慎獨

心が虚に歸するは誠意慎獨より入る、意識なるときは則ち忿懣恐懼好樂憂患する所あることなし、故に心が虚に歸せば一も忿患所あらば則ち虚に非ず。(同上)

三 禪學に陥らん、

人心が太虚に歸するも亦た慎獨克己よりして入る、如し慎獨克己より入らずんば即ち禪學虚妄なり、所謂壑蓋千里なり故に心學者は動もすれば之を誤るなり。(同上五丁)

四 斃れざる内の功夫

學は固より己が心を正し己が身を修む、然れども己が心を正し己が身を修むるのみを以て學の至と爲すは蓋し大人の道に非ず、夫れ身外の虚は皆な吾が心なり、則ち人物は心中に在り、其の善を爲し惡を去るも亦我身の事にして而して其の善を爲すも亦窮なく、惡を去るも亦窮なし。故に大人斃れて而して後に休む、故に斃れざる内に其をして善を爲し其をして惡を去らしむるは便ち是れ功夫なり。(同上三十七丁)

五 人の能事

夫れ道なる者は太虚のみ、故に學て而して太虚に歸するときは則ち人の能事畢る。(同上五丁)

以上に列記したる五條は中齋の歸太虚説の要旨にして其他の説は之を劄記に譲れり、中齋は畢生の心願として歸太虚の功夫を爲す者なれば其の熱心其の周到實に

驚くべきものあり然れども之を概括的に陳ぶれば歸太虚の功夫は即ち致良知を以て第一要件と爲すことは明かなり。其の致良知は王陽明の詳説せし所にして中齋は直ちに之を受用せしものにして唯だ少しく之を敷衍したるのみなり、猶ほ左に中齋が歸太虚の希望を述べたる一條を掲げ且つ彼が歸太虚的努力の一斑を論ぜんとす、中齋曰く、

吾既に職を辭して隱に甘んず、險を脱して安に就く、宜しく高臥して勞苦を舍て以て自性を樂むべし、然かるに夙興夜寢以て經籍を研き生徒に授くる者は何ぞや、此れは是れ事を好むにあらず、是れ口を糊するにあらず、詩文の爲にあらず、博識の爲にあらず、又大に聲譽を求むるにあらず、再び世に用ひらるゝを欲するにあらず、只だ學て而して厭はず、人を誨へて倦まざるの陳迹を扮し得るのみ、世人は惟むこと莫れ、又た罪すること莫れ、嗚呼心の太虚に歸するの願は則ち誰か之を知らんや、獨り自ら知るのみ。(割記上、二十四丁)

中齋は平時間斷なく太虚に歸する能はずとするも其の修養の最終目的として之に向つて熱心に努力したれば時々歸太虚の境に達したらんと推測せらる、然れば滿心割記等に説く所の歸太虚主義は全く空論又は過高の言とは謂ふべからず、今假りに論語に顔回か三月仁に違はず其餘は日月に至るのみと曰へるに比して考ふれば中齋は日月に太虚に歸するの境に進めるものと謂ふべきか、如何に低く之を視るも

峻嚴なる資性の中齋の熱烈なる修養的努力は必ず相當の效果ありしならん。例せば浩然の氣を養ふが如きも其の養方の如何に由りて浩然の氣を保つの長短深淺あるが如く歸太虚も亦其努力の多少に困りて其境に一進一退あるを免かれざるべし。

中齋は其の著割記に顔子と聖人との例を引て歸太虚の程度を示せり曰く、

顔子は屢々空しとは心が屢々太虚に歸して猶ほ一息あり、聖人は即ち徹始徹終、一太虚のみ。
(割記二三枚)

心の欲する所に従うて矩を踰えざる聖人は即ち徹始徹終仁の境に在り、中齋の所謂太虚の全徳靈明を全うする者なり。凡そ古人の立言には既に自ら充分其境に達して後に發したるものと、猶ほ未だ其境には達せざるも常に自己が努力して進むべき標的として發するものあり、中齋の洗心洞割記に説く所は則ち明かに後者に屬することは屢自ら言へる所なり。中齋が妄りに過高の論を爲して世人を驚かすものとは評し去るべからざるなり。

富士絶頂即事

大 齋 中 齋

口吐ニ太虚ニ容ニ世界ニ

太虚入レ口又成レ心

心與ニ太虚ニ本一物

人能存道只今乎

下 結 論

上來略論せし所は中齋の學說の要領にして彼の所謂孔孟學の骨子なり、彼の標榜せし五綱領たる去虛僞、一死生、變化氣質、致良知、太虛の説は其の創唱と謂ふべからざれども、彼が全力を盡くして之を實踐せんとしたる所は彼の言動をして遙かに尋常人に卓越せしめたる所以なり、彼の事功は其の微賤なる地位と在職の短期なるとに比しては大に稱すべきものあり、彼の學問は固より深遠ならず、彼の學殖、彼の詩文も亦た當時の諸學者に比して優れたるものにあらず、然れども彼の獻身的活動に至つては殆ど他に匹儔を見ざるものあり、今彼の最後の一舉に就て論ぜんと欲す。

中齋が隱居の身を以て時事に憤激して兵を擧げたることは熊澤蕃山が封事を上りしと同一主意ならん。

徳川五代將軍常憲公の時即ち貞享四年冬蕃山は意見書を幕府に上りて海内の政務を改革せんことを請ふ、其事機密に涉り、大に將軍の旨に忤ひ乃ち下總國古河城下に禁錮せらる、此時蕃山は松平日向守信之の監視の下に在り、幽囚大約四星霜の久しきに及ぶ然れども面に憂色なし、人の當世の事を問ふものあれば默然として答へず、

乃ち笹を取りて之を吹く、元祿四年八月十七日卒す、歳七十有三、古河城外大堤村の鮭延寺に葬る、蕃山夫妻の墓は同寺に在り。香華常に絶へず。又近年同地に蕃山會を組織して歳時之を祭祀せり。予は明治四十三年暮春往て蕃山の墓を古河城外に弔せり。蕃山が封事を上りし時の態度を見るに左の言あり、曰く、

「人は萬物の靈なるが故に心だに動かす候へば何ものも害なす事はならぬものにて候へ余も又一人の天民なり、天の靈あり、言はざるは罪あることに候」

と、蕃山の良知の光明の歌々たるを知るべく、又以て知行合一たるを察すべし、中齋の擧兵の一條も亦た眞に此の致良知と知行合一より起れること明かなり。

題不レ知

大 鹽 中 齋

新衣着得祝新年一

羹餅味浪易下レ咽

忽思城中多菜色一

一身温飽愧予天一

以上に論述せし如く中齋は常に熱心に歸太虚の功夫を凝らし、未だ充分ならざりしにせよ、天地萬物一體の至大の仁の觀念の下に行動しつゝありしなり、其の隱居の身を以て時事に憤慨して獻身的擧動に出でたることは全く此の至大の觀念に基けるものと見るを得べし。

凡そ吾人が先哲の事跡を評論するには動機方法結果の三段に分ちて考究するを

要す、中齋が最後の一舉は其動機は明白に救民に在りて其他には何等の野心もなかりしものなれば之を純然たる太虛主義より起りて良知を致したるものと爲し之を善と認むべきものなり、此一段は蓋し何人も異論なかるべけん、其手段としての舉兵は全く輕舉妄動と謂ふの外なく、何人も之を辨護するものなし、然れども第三段の結果に至りては深く熟討を要する所にして輕忽に之を論斷すべからざるなり、試に問ふ動機善、方法惡にして其結果は善なりと謂ふべからざるか、中齋の一舉が數千戸の家を焼き大阪市民を驚かし、天下をして騷然たらしめしは甚だ憎むべしとするも其の純潔なる動機は之に由りて著しく露はれ遠く知られ、久しく泰平の名の下に惰眠を貪れる徳川幕府を驚殺せしめたり、此時の幕府の周章狼狽の狀は天下の識者をして幕府の既に無氣力無能に陥れることを知らしめたり、此一事よりして民望漸く地に墜ち天下一般に幕府の復た恐るゝに足らず、宜しく之を倒滅して皇室の隆昌を謀るべしとの氣運を生したること蓋し疑ふべからざるなり、一花飛て天下の春を滅却し一葉落ちて天下の秋を知ると云へば中齋が幕府に對して一撃を加へたることは則ち倒幕勤王の魁と謂ふも溢美に非るべし。

春日潛庵居常大鹽中齋を稱して曰ひけるは

中江藤樹、熊澤蕃山、三輪執齋三子の後、獨り此の老あるのみ、世の人概ね成敗の迹につきて論じ呼びて亂臣賊子となしぬ、悲むべきなり、此の老の兵を擧げしは勤王の先鞭を着けたるものなれども、幕府なほ盛なるの口にありしをもて、人皆悟らざるなり、此の老争でか功名富貴をのぞみて此の擧をなすものならんや。(國府種徳著大鹽平八郎)

潛庵の評眞に當れるものなり、夫の韓の張良が博浪沙に於て秦始皇に一撃を加へたるは果して如何なる影響を生じたるか、唯彼の一撃を無謀なる壯士の暴擧と見るべきか其失敗に歸せしを以て何等の影響もなかりしと見るべきか、其の間接の影響は天下の人をして世には能く始皇に反抗する者あるを知らしめ、民望の充分始皇に歸せざることを表はし、遂に秦の滅亡を速からしむるの一因と爲りしならん。

中齋の義擧が勤王倒幕の先驅を爲したりとの説は潛庵以外の者も心には之を思へども之を口にするを憚りたる者多かりしならん、中齋の檄文にも明かに「天照皇太神の御時代に復し難くとも中興の氣象に回復せん云云の言あるにあらざや、蓋し中齋無二の心交、頼山陽が日本外史を著はして勤王の志氣を鼓舞したると其の志と功とを比較すべきものあらん。上述の如くなれば中齋末路の一擧の結果は小惡大善と謂ふべく近惡遠善と謂ふべし、今日は既に中齋を去ること八十年なれば今後年を経るに隨うて中齋の眞價は何の憚る所もなく能く公明正大に發揮せられ、漸次私淑

者を増加し尊敬者を續出するに至らん。十年以前より起れる大阪陽明學會の如きは明かに浪華の奇傑大鹽中齋敬慕者の一團隊たるものと見るべきなり。左に一首の拙作を録して結論の終結と爲す。

詠 大 鹽 中 齋

拙 稿

衝天意氣吞鯢鯨

聰明兼以學術精

富貴不淫威不屈

斷獄處事出至誠

誅戮汚吏弊政革

掃攘妖巫風教清

言聽謀用感知遇

此身進退唯任卿

蹶然勇退賦招隱

洗心洞裏育群英

知行並進期合一

良知明瑩監百行

時是天保歲頻饑

餓莩橫途多哀聲

太虛心胸無人我

斯秋傍觀不堪情

進訴府吏吏峻拒

退謀巨商商不迎

憤然賣却書萬卷

代穀與錢恤斯氓

府吏何者阻我志

極力擠排陷禍阨

嗚呼百姓困窮天祿絕

酷吏不誅奈蒼生

平生所學果何事

仁人一死鴻毛輕

君不見熱血淋漓天誅愾

又不見赤誠逆出救民旌

蛟龍一夜蹴波起

烽火數條照金城

天未定人勝天矣

史上誤傳鹽賊名

休謂舉措非中道

爲賊爲狂任他評

迹或難取意可取

輕舉惜招後世爭

王政復古鞭先着

他年大業以序成

姚江學派爲添彩

好哉人稱小陽明

附記

參考書

- (一) 洗心洞剽記二冊、(二) 同附錄抄一冊、(三) 古本大學刮日七冊、(四) 儒門空虛聚語、二冊、(五) 洗心洞學名學則、並答人論學書略一冊、(六) 三子標釋、增補孝經彙註三冊、(七) 奉納書籍聚跋一冊、以上中齋著、(一) 洗心洞詩文二冊、中尾捨吉編、(二) 大鹽平八郎一冊、幸田成友著、(三) 同上、國府種德著、(四) 華盛擾記事、東湖見聞偶筆、東湖全集之內、(五) 慶弘紀聞卷七、源照矩著、(六) 大鹽中黨論、井上哲次郎先生、(日本陽明學派之哲學)七、同上、大西祝博士、(六合雜誌)八、咬菜秘記、坂本鐵之助、(雜誌江戶)九、浪華筆記一名、天滿水滸傳、十二卷、(三) 大鹽平八郎傳記一冊、(二) 大鹽平八郎一件筆記、(三) 洗心洞餘瀝、疋田竹翁談、鐵華書院、陽明學第四十一號、四十五號、(三) 中齋評、林良齋、田結庄千里、近藤篤山、田能村竹田、(四) 鹽述、十二卷、附錄二卷、鹽賊騷亂記、五冊、(五) 浪華綠林、(作信友)六、評定所吟味、何書七、王造組與力同心、働前明細書、(六) 佐藤一齋與中過尺牘、(元) 山陽遺稿、(三) 以上參考書以外、尺牘等、(三) 青天霹靂一冊、中島仲襄著、(三) 今古民權、開宗大鹽平八郎言行錄一冊、井上仙次郎著、(三) 大正五年三月二十二日大阪朝日新聞の大鹽中齋に就ての記事、(高) 孝經講義一冊、中齋講(刊本) (完)